

* 研究目的

世界では、米国をはじめ先進国において 1980 年代ごろからに高等教育が大衆化され、これまでの伝統的な知識伝達・習得を目的とする教育が通用しなくなってきた。

そのため米国国立教育研究所が学生を目線で教育をとらえ、「学習への関与論 (Involvement in Learning)」という考えを生み出し、レクチャー型から学生中心型教育への転換の必要性を説いた。日本では 90 年代に同様の流れの中で、参加型授業、課題解決型学習といった教員による授業実践に重点を置いた対策に焦点が当てられ、Faculty Development (FD) も実施されるようになった(溝上, 2014)。

このような背景から、文部科学省がアクティブラーニング(「課題の発見・解決に向けた主体的協同的な学び」)を提唱し、本学においても「アクティブラーニングと“顔の分かる”少人数教育」を大学全体の新機軸としている。確かに各学部・センターにおいて課題解決型学習等は行われるようになってきているが、「主体的・能動的な学び」という点について、どういった教員が、どのような手法でそれを促進・抑制し、教員・学生はどのようにその違いや変化を実感しているのかはまだ明らかになっていない。

OECD も世界共通の教育方針(2012)においてエンゲージメントに注目しているが、日本をはじめアジアの English as a Foreign Language (EFL) 諸国のエンゲージメント研究はまだそう多くない。

そこで、本研究は、まず一般的にエンゲージメントの高い語学学習とはどのような学習であるか、またアジアの EFL 環境においてエンゲージメントを促進・抑制する教員や学習環境が持つ特徴は何かについて研究する。

さらに、特に日本人英語学習者向けの英語プログラムにおいてエンゲージメントがどのような意味を持つのか検証する。

* 研究チームメンバーと研究課題

吉田桂子 国際言語文化センター・准教授

研究テーマ：プロジェクト全体のコーディネートフォーカス・グループの召集・主導
インタビュー、授業観察等

Brent Jones マネジメント創造学部・教授

研究テーマ：課題解決型学習の調査、インタビュー、授業観察、データ分析

Roger Palmer マネジメント創造学部・准教授

研究テーマ：学習者エンゲージメントのモデル調査データ分析補佐

浅羽真由美 マネジメント創造学部・特定任期教員

研究テーマ：大容量・高頻度データを利用した実証分析